

第8回 地域医療貢献奨励賞 受賞者（平成26年度）

山田 昌弘	山形県東置賜郡川西町 公立置賜総合病院・副院長
<p>昭和55年自治医科大学卒。昭和58年から川西町立病院に勤務し、義務年限終了後も、引続き率先して同病院に勤務。平成9年4月には、同病院長となり、県内有数の豪雪地帯である川西町において、農山村地域の医療確保・医療充実に尽くすなど、診療や地域住民の健康づくり等に尽力してきた。平成12年からは自治体病院の統合再編により設立された公立置賜総合病院(へき地医療拠点病院)の外科医として勤務し、全国的に初めて導入されたサテライト方式のスムーズな運用を図るため、医療連携を推進してきた。また、OKI-net(置賜地域医療情報ネットワークシステム)の設立に中心的な役割を担うなど、他地域への支援や連携にも積極的に取り組み、県内における地域医療の充実に貢献している。公立置賜総合病院には12年に亘り勤務し、川西町立病院での勤務を含めると、地域医療従事は30年の長さに及ぶ。平成25年4月には公立置賜総合病院の副院長に就任している。</p>	
藤井 佑二	東京都大島町 大島医療センター・院長
<p>昭和45年順天堂大学医学部卒。昭和53年から大島町で藤井医院を開業していた実父の依頼により、離島というへき地での勤務をスタート。5年間勤務後、一旦大島町を離れるが、平成16年に大島医療センター(既存の3診療所を集約し、同年に開設された公設民営型の診療所)の理事に就任し、その後精力的に町民への医療を続けている。専門は消化器外科であるが、診察する患者にとって最良の治療方法を常に探究し、患者へ丁寧に説明、町民から厚い信頼を得ている。インフォームド Consentという言葉が普及する以前から医療現場で実践してきた。また、日々の外来診療の他、在宅患者の訪問診療、障害者施設や老人ホームへの往診など、多忙な診察をこなし、急患があれば昼夜を問わず診察、今も月6回の当直勤務に就いている。昨年10月の台風第26号による土砂災害時は、先頭に立って医療現場を統括し、さらに新たな台風接近に伴う二次災害対策として、入院患者の島外避難に際しては、14名の患者一人ひとりにつき添い、容態を気づかいながら、自衛隊輸送機に搭乗させた。内地との医療格差を少しでも解消させたいとの思いと、島の町民が安心して暮らせるよう、また、安心できる医療を確保し提供できるよう日々遇進している。</p>	
南 眞司	富山県南砺市 南砺市政策参与、 地域包括医療・ケア局地域包括課顧問
<p>昭和52年金沢大学医学部卒。昭和58年から内科医長として南砺市民病院の前身である井波厚生病院(平成4年公立井波総合病院に改称)に着任以来、31年間にわたり地域医療の進展と地域包括ケアシステムの体制づくりに尽力した。平成2年より副院長、平成14年4月には保健福祉医療部長、地域リハビリテーション科部長を兼務。翌15年にはデイケアセンター長も兼務と精力的に取組み、中山間地という地理的に不便な環境と過疎化の進行による超高齢化社会の到来を見据え、市民病院において地域包括医療・在宅医療の基盤整備を積極的に図った。平成16年11月に4町4村が合併して南砺市民病院に改称され、平成19年10月には同院長に就任、総合診療医の育成を優先課題とし、平成21年から研修医の受け入れを開始した。富山大学総合診療部の協力を得て南砺市民病院の後</p>	

<p>期研修プログラムは「NANTO家庭医養成プログラム」の愛称で、家庭医・総合医育成に努めている。平成26年3月に病院長を退いた現在も、南砺市民病院嘱託医として現場の第一線に立つ一方で、南砺市政策参与として地域包括課顧問に着任し、南砺市の地域包括医療・ケアの体制確立に引き続き尽力している。</p>	
二村 昭	三重県南牟婁郡紀宝町 紀宝町顧問
<p>昭和43年京都大学医学部卒。昭和50年6月、三重県熊野保健所技師として奉職、三重県熊野保健所長を歴任した。循環器健診と健康教育を結びつけた循環器健康システムを紀南地域に構築・定着させ、積極的に山間へき地を巡回して脳卒中死亡率の低下に貢献した。昭和63年からは三重県最南に位置する紀宝町に奉職。定年退職となる平成20年までの18年間、当時医師が不在であったへき地診療所・紀宝町立相野谷診療所長を勤め、訪問看護・在宅看護支援事業を展開し、積極的に在宅医療の普及に努めた。同時に歴任した紀宝町健康管理担当参事、同理事として、昭和63年には、高齢者の健康問題に対処するため、保健医療福祉を包括した「紀宝町総合保健計画」を立案し、食生活・運動習慣・対人関係における行動習慣などを、より健康的な習慣に改めるための診断・生活処方などに重点をおいた医療活動の普及に努めた。また、平成9年には、「健康文化の町づくり計画」を策定し、住民の創意工夫による主体的な健康習慣の形成が可能な町づくりの構築に貢献した。平成20年から6年間は、紀宝町の医療及び福祉行政の一体的な推進を図るための紀宝町特別参与に就任。平成26年4月からは、紀宝町顧問に就任し、紀宝町の健康管理医師として、引き続き尽力している。</p>	
濱田 邦美	徳島県那賀郡那賀町 相生包括ケアセンター・センター長
<p>昭和62年自治医科大学卒。平成元年から、へき地医療支援病院である「県立三好病院」を皮切りに、県内のへき地診療所長を歴任し、現在は那賀町相生包括ケアセンター長として、25年間にわたり、第一線の現場で身を挺して活動している。「住みよい町づくり」を目指して住民と行政とのコラボレーション・連携に向けた取り組みを先進的に進めてきた。保健・医療・福祉の各分野が一体となった複合施設をつくるためのプロジェクトチームを自らが先導し、平成10年秋には、県内で初となる24時間・365日対応できる医療施設を核として、訪問看護ステーションやデイケア、在宅介護支援センターなどを併設しサービスを提供する「相生町包括ケアセンター」を完成した。地域に根ざした「住民本位」の取り組みを積極的に推進し、その取り組みは全県的にも参考にすべき事例となっている。平成22年度においては、政府の「社会保障改革に関する集中検討会議」の委員に任命され、地域医療を担う現場の医師の代表として、国の社会保障と税の一体改革に助言を行った。「住んでみたい・住んで良かった町づくり」を目標として、お互いに助け合いながら自立できる地域づくりに向け、幅広い分野で住民と行政の橋渡し役として活躍している。</p>	
鈴木 済	鹿児島県薩摩川内市 里診療所・所長
<p>昭和59年自治医科大学卒。鹿児島県立北薩病院や県内のへき地診療所等の勤務を経た後、平成15年4月、薩摩郡里村へき地診療所(現在の薩摩川内市里診療所)へ着任した。里診療所は薩摩川内市の外海離島である上甕島の里町内にあり、唯一の医療機関であるため、町内で発生するすべての傷病に対し24時間体制で対応している。1日平均約60人もの外来患者の診療に1人あたるとはるほか、事故や急病患者などに対する初期対応、高齢</p>	

者等への訪問診療や各種健診等などその業務は多岐多様にわたっている。また、児童・生徒や施設入所者の健康保持にも尽力し、保健医療福祉に従事する関係機関の職員とのカンファレンスも積極的に推進している。患者ひとりひとりの性格や生活状況、そして家庭環境等まで熟知し、地域住民のかかりつけ医として、全幅の信頼を得ている。そのような中、平成21年7月、隣接する上甕町内の上甕診療所の常勤医師が退職し、医師不在となったため、上甕診療所所長も兼務し、上甕診療所の維持・存続に奔走した。里町のみならず、上甕町を含めた上甕島における医療の確保及び地域住民の健康福祉の増進等、離島医療に携わる医師の模範である。